

パラッツォ・ヴェッキオの歴史

松 本 典 昭

はじめに～パラッツォの歴史的意義

ルネサンス美術発祥の地フィレンツェは、ちょうど19世紀のパリがそうであったように、文化的であると同時に政治的な、あまりに政治的な都市であった。市民の政治意識が高く、党派争いが絶えず、政治体制が転々としたことは、ニコロ・マキアヴェッリ（1469-1527）の『フィレンツェ史』¹⁾があますところなく描いている通りである。そうした政治都市の政治的中心であったのが政庁舎、現在のパラッツォ・ヴェッキオである。

政庁舎は当初「パラッツォ・デイ・プリオリ」「パラッツォ・デッラ・シニョリーア」「パラッツォ・コムナーレ」などと呼ばれ、16世紀前半には「パラッツォ・ドゥカーレ（公爵宮殿）」、16世紀後半には「パラッツォ・ヴェッキオ（旧宮殿）」と呼ばれて現在にいたっている。市民のあいだでは、ちょうど「ピアッツァ（広場）」というだけで政庁舎前の「シニョリーア広場」を指すように、ただ「パラッツォ（館）」というだけで「パラッツォ・ヴェッキオ」を指すほどに、それは特殊な意味合いをもつ建物であった。

14世紀から15世紀にかけての政庁舎は、文字通り血で血を洗う政争の舞台となった。1378年のチョンピの乱では、参政権を要求した下層労働者が政庁舎を占拠したが流血のうちに鎮圧された。1478年のパッツィ家陰謀事件では、大聖堂でジュリアーノ・デ・メディチが刺殺された直後に舞台は政庁舎に移されたが、結局、陰謀加担者が政庁舎の窓から吊るされて終結した。

また政庁舎の塔のなかにある「アルベルゲッティーノ」と呼ばれる牢獄には、1433年にメディチ家のコジモ・イル・ヴェッキオ、1498年にサン・マルコ修道院長サヴォナローラが収監された。そのサヴォナローラは1497年と翌98年に広場で「虚栄の焼却」を指導したが、同98年5月23日には同じ広場で処刑された。政争のたびに窓から投げ落とされた人の数も数えきれないほどある。

血なまぐさい政争のいっぽうで政庁舎は知性の中枢でもあり続けた。共和国書記官長のコルッチョ・サルターティ（1331-1405）、レオナルド・ブルーニ（1370頃-1444）、ポッジョ・ブラッチョリーニ（1380-1459）は市民的人文主義者として15世紀フィレンツェの令名を高めることに貢献した²⁾。共和国書記官長の掉尾をかざるマキアヴェッリは、その知的伝統をひきつぐ行動的知識人であり、現在、三階の「書記局の間」にはマキアヴェッリの肖像画（サンティ・ディ・ティト作）と胸像（作者不詳）が展示されて往時を偲ばせるよすがとなっている。政庁舎は共和国の心臓であると同時に頭脳でもあったのだ。

このようにパラッツォ・ヴェッキオの歴史はフィレンツェの歴史そのものであるといっても過言ではない。にもかかわらずその歴史がまったく紹介されてこなかったことは、フィレンツェ史研究の重大な欠陥といわざるをえないであろう。

パラッツォ創建

政庁舎の建設は13世紀末に遡るが、その歴史

的背景がいかなるものであったかをまず説明しておく必要がある。13世紀のフィレンツェは、商業、毛織物業、金融業の驚異的な発展の時期であると同時に、その経済発展を担った商人、織元、銀行家など新興の富裕市民層（「ボーボロ・グラッソ」と呼ばれる）が、同業者組合（アルテ）を組織して旧勢力の封建貴族層を下から突き上げつつあった。

ちょうどその頃、フィレンツェは1216年の事件をきっかけにギベッリーニ派（皇帝派）とゲルフィ派（教皇派）に分かれて党派争いを繰り返していたが、前者に結集したのが主に旧勢力の封建貴族層、後者に結集したのが主に新興の富裕市民層であった。ギベッリーニ派はホーエンシュタウヘン家の皇帝フリードリヒ2世の支持を得て1237年以降フィレンツェを実質的に支配していたが、1250年の皇帝の死とともに、ゲルフィ派が都市の権力を奪取し「プリモ・ボーボロ」と呼ばれる第一次平民政府を樹立した。この時期は商工業市民層が初めて政治の主役になり、カピターノ・デル・ボーボロ（市民軍司令官）の創設、その邸館としてのパラッツォ・デル・ボーボロ（現、バルジェッロ国立美術館）の建設、フィオリノ金貨の鑄造、都市の紋章（白地に赤百合）と市民軍の紋章（マルゾッコ）の決定など、その後の都市の繁栄の基盤が築かれた時代であった。だがわずか10年後の1260年、ギベッリーニ派が政権に返り咲いたのも束の間、1266年にはホーエンシュタウヘン家のマンフレディの敗戦により再度ゲルフィ派が政権を奪い返し党派争いに決着をつけた。党派争いは数十人から数百人規模の追放や家屋の没収と破壊をともなったが、以後フィレンツェはゲルフィ派（教皇派）の都市として着実な発展の道をたどることになるのである³⁾。

さてこのゲルフィ都市で、1283年にプリオーレ（執政官）が設置されたのに続いて、1293年にジャーノ・デッラ・ベッラが発案した「正義の規定」により「正義の旗手（ゴンファロニエーレ・ディ・ジュスティツィア）」という執政長官の役職が新設された。議長役の「正

義の旗手」は1名、プリオーレは六地区から1名ずつの6名（1343年以降は四地区から2名ずつの8名）で、彼らが共和国政府シニョリーアを構成した。彼らは独裁を避けるために2カ月任期という短期交代制であり、市民に権力が公平に分散するように籤引きで選出された。彼らが任期中に住み込んで政務をとるための政庁舎の建設が急務となった。建設用地の選定には手間取ったが、ちょうどギベッリーニ派のウベルティエーニ家の家屋が取り壊された跡地があり、その空き地を中心にサン・ピエロ・スケラッジョ聖堂（現在ウフィツィ美術館のある場所）方向に周囲の家屋を購入したり、取り壊したりする決定がなされた。

1299年2月24日、政庁舎の建設が始まった。同時代のヴィッラーニは『年代記』のなかで建設に言及しながら建築家の名前をあげていない。アルノルフォ・ディ・カンピオ（1245頃-1302）の名が出てくるのは、16世紀にヴァザーリが『美術家列伝』のなかで次のように書いてからである。「彼（アルノルフォ）はパラッツォ・デ・シニョーリの造営に着手し、それを父のラーボがかつてポッピ伯のためにカゼンティーノに建てた邸館と似た形に設計した。」⁴⁾ヴァザーリの説を裏付ける他の資料はないが、当時アルノルフォは新市壁（1284年着工）、サンタ・クロチェ聖堂（1295年着工）、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂（1296年着工）といった都市の重要建築を設計しており、政庁舎の設計にも関与したと考えることは不自然ではない。

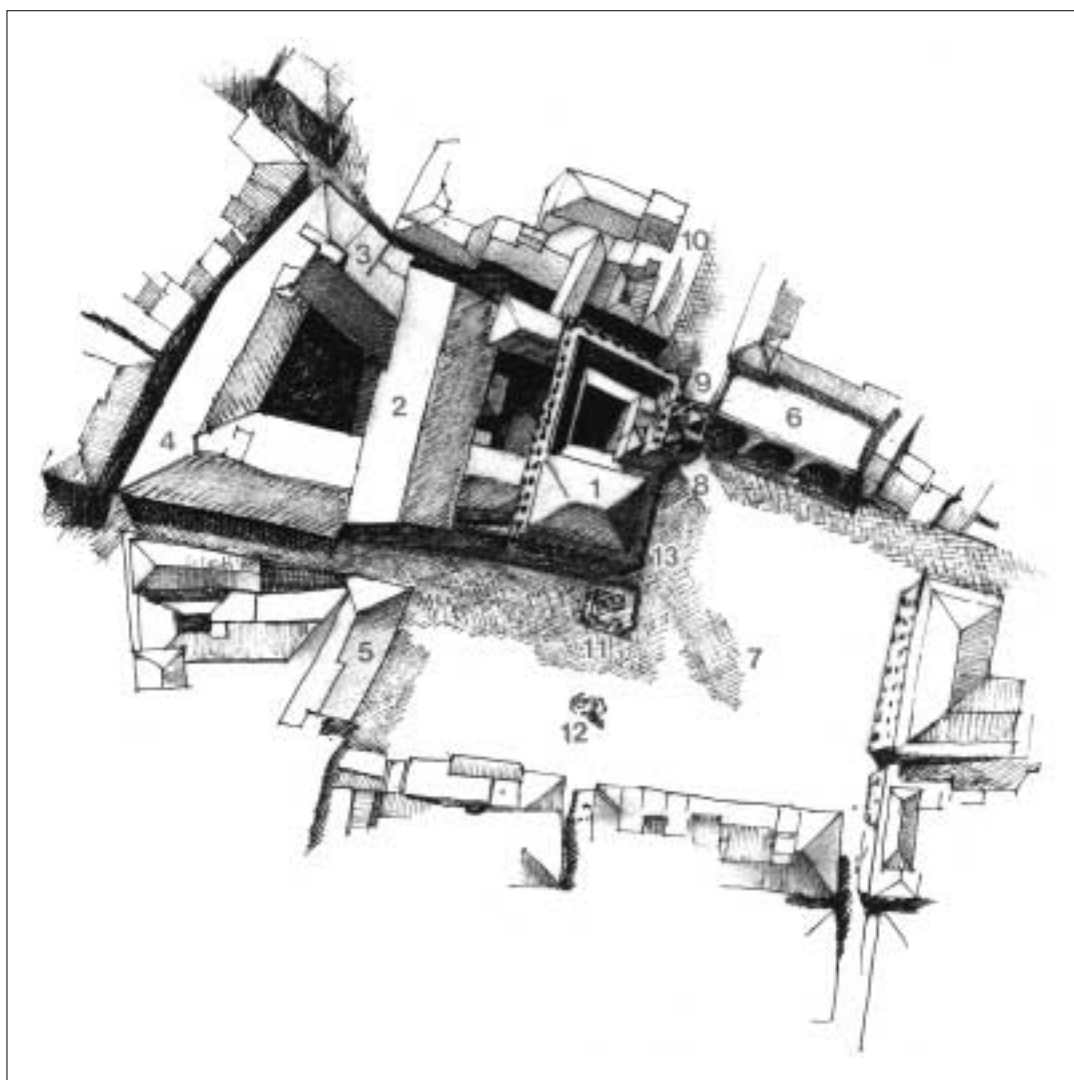
建設はシニョリーアの仮の住まいであったサン・ピエロ・スケラッジョ聖堂の側から始まったと推測される。建設には既存の家屋が利用され、フォラボスキ家の塔がそのまま利用された。この塔はギベッリーニ支配時代に造られたものであったが、1250年のゲルフィ派の条令で他の塔とともに一律50ブラッチョ（1ブラッチョは58.4cmで、約29m）の高さまで短縮されたものである。ギベッリーニ時代の遺物であることは、塔の先端の燕尾型のギベッリーニ狭間が示

している。1301年以前に塔に取り付けられた鐘は、プリオレの最後の居館であったチェルキ家から移されたものである⁵⁾。

ともあれ建設は急ピッチで進められ、建設中の1302年3月26日には、すでにシニョリア臨

席の重要な会議が開催されたが、北側に新設された「議会の間」(現、「二百人広間」)で大議会議が開催されるのは1313年3月24日をまたねばならなかった。しばらくして中庭と塔が完成し、一階には武器庫も完成した。この武器庫は創建

図1 パラッツォ・ヴェッキオとシニョリア広場



1. 14世紀の建築部分 2. 五百人広間 3. コジモ1世時代のバットISTA・デル・タツソの増築部分 4. フェルディナンド1世時代の増築部分 5. 商事裁判所 6. ロッジャ・デイ・ランツィ 7. サヴォナローラ処刑の円形銘板 8. ミケランジェロ作「ダヴィデ」の模刻 9. バンディネリ作「ヘラクレスとカクス」 10. ウフィツィ美術館 11. アンマナーティ作「ネプトゥヌスの噴水」 12. ジャンボローニャ作「コジモ1世騎馬像」 13. ドナテッロ作「ユディット」の模刻

出典) Muccini, U., *Palazzo Vecchio*, Firenze, 1989, p. 12.

当時の面影をいまに伝えるほとんど唯一の場所である。こうして中世の政庁舎は1314年に一応の竣工をみた。現在のパラッツォ・ヴェッキオと比較すると、五分の一程度の小規模なものに過ぎないが、ピエトラ・フォルテ（硬質砂岩）の切り石を積み上げたルスティカ仕上げの城塞風の外観は、いかにも権力のぎっしりと詰まった厳重な金庫のような威圧的な印象を見る者に与えたことであろう（図1）。

14世紀の増改築

政庁舎の創建当初、ゲルフィ都市フィレンツェは白派（ピアンキ）と黒派（ネーリ）という新たな党派に分裂していた。独立路線を望む白派はどちらかといえば皇帝寄りで、逆に黒派は教皇庁とフランスに傾斜していた。1300年に始まった抗争は1302年に黒派の勝利をもって終結した（このとき白派のダンテも追放された一人である）が、フィレンツェはトスカーナの覇権争いのなかで困難に直面するたびに教皇庁とフランスの支援をあおがねばならなかった。そうした混乱が外国人統治者の介入を招く結果となった。アンジュー家のナポリ王ロベルト（ロベール・ダンジュー）（治、1313-21）、その息子カラブリア公カルロ（治、1325-28）、ナポリ王ロベルトの女婿アテネ公ゴートイエ・ド・ブリエンヌ（治、1342-43）である。

この三人目のアテネ公ゴートイエ・ド・ブリエンヌの時代は、政庁舎の最初の増改築が断行された時期である。この暴君はフィレンツェ市民を力づくで支配しようとし、まず政庁舎の要塞化に着手した。正門と武器庫の門の前に高い城門を増築し、防壁を張り巡らし、現在五百人広間の占める側を城塞化し、現在のニンナ通りとレオー二通りの角の方角に防壁を延長した。これらの増改築事業は、アンドレア・ピサーノが設計と指揮を担当したとヴァザーリは述べているが、それを裏付けるなんの証拠もない。いずれにせよ暴君アテネ公の支配は短命に終わり、その追放とともに増築部分も撤去された。

1343年7月26日、聖アンナの祝日に、フィレンツェ市民が政庁舎を包囲し、アテネ公を追放したこの有名な事件については、貴重な絵画史料が残っている。古いスティンケ牢獄で発見され、現在はパラッツォの三階の「サロッタ」に移されているフレスコ画がそれである（図2）。

壁画の左側では聖母マリアの母アンナが市民にフィレンツェの各種の旗を授け、右側ではアテネ公が天使に追い立てられているが、中央の政庁舎にアテネ公の増築部分が鮮明に描かれている。正門と武器庫の門に背面を付けて二階までのびた二つの高い城門がはっきりと見て取れる。そして二つの城門は横にのびた防壁でつながり、1323年にシニョリーアが造らせた「アリンギエーラ」と呼ばれる桟敷を覆い隠す格好になっている。二階と三階の窓は、フィレンツェの百合とポーポロ十字の紋章の付いた優雅な二連窓。それとは対照的に一階の窓は高い所に位置して、しかも鉄格子で防御されている。二階と三階のあいだの四角い小窓は、二階の天井と三階の床のあいだの木造部の換気の役割をしている。最上部を環状に取り巻く防御目的の張り出し回廊には、堅固な方形のゲルフィ狭間が取り付けられている。このとき塔の建設も尖塔部分を除いて完了していることがわかる。

尖塔は人口が半減した1348年の黒死病のあとの1353年に取り付けられた。尖塔の先端には三裂の百合と「レオーネ・ランパンテ」と呼ばれる後足立ちのライオンの風見が立てられている。同じ1353年には塔に機械時計も取り付けられ、1354年3月25日から時を刻み始めた⁶⁾。受胎告知の祝日にあたる3月25日がフィレンツェ暦の元旦だったのである⁷⁾。ともあれこうして市民は、鐘の音が告げる「教会の時間」とは別のも、「世俗の時間」を生き始めることになる。

その頃、張り出し回廊の下にフィレンツェ共和国の各種の紋章が描かれたが、紋章の意味と意匠は左から次の通りである。カピターノ・デル・ポーポロの紋章（白地に赤十字）、ゲルフィ都市の紋章（白地に赤百合）、フィレンツェとフィエーゾレの紋章（紅白に二分された

図2 オルカーニャ作「アテネ公の追放」(サロット所蔵)



出典) *Ibid.*, p. 116.

盾), 教皇庁の紋章(青地に交差する二本の鍵), シニョリーアの紋章(青地にLIBERTASの金文字), ゲルフィ党の紋章(緑の龍を組み付す赤鷲で, 頭には金百合), ギベッリーニ都市の紋章(赤地の白百合), アンジュー家のカルロとロベルトの紋章(青地に複数の金百合と赤色の矩形), ハンガリー王アンジュー家のルドヴィコの紋章(右には青地に金百合, 左には白と赤の交互の帯に二分された盾⁹⁾). 紋章という表層的シンボルからして, すでに中世の共和制都

市国家の複雑な権力構造を物語っている。

さて広場のほうは, 1319年にピエトラ・セレーナの幾何学的な網目模様のなかに赤レンガを敷き詰めることが決定されていたが, 実施は難航した。難関は広場の拡張問題である。アテネ公ゴーティエ・ド・ブリエンヌは, サン・ロモロ聖堂とサンタ・チェチリア聖堂, さらにその周辺家屋などを取り壊そうと目論んだが, 教会側の猛反対と支配が短命に終わったことで計画は頓挫した。14世紀の後半になって妥協的解

決策が見つかり、聖堂、家屋、工房を取り壊すかわりに、もう少し後ろにずらして再建することになった。サン・ロモロ聖堂は1356年に取り壊されてすぐに再建され、周辺家屋も1362年には再建が完了した。

1374年から82年にかけてベンチ・ディ・チオーネとフランチェスコ・タレンティの監督のもとに広場にロτζジャ（開廊）が建設され、1384-89年にヤコボ・ディ・ピエロ・グイディとジョヴァンニ・ダンブロージョが制作した「諸徳像」が半円アーチの上のスパンドレルに取り付けられた。このロτζジャは現在、設計者の名をとって「ロτζジャ・デル・オルカーニャ」、もしくは16世紀のコジモ1世時代に守備隊のドイツ人傭兵（ランツィケネッキ）の詰所だったことから「ロτζジャ・デイ・ランツィ」と呼ばれている。しかし本来は公共の祭典の際にシニョリーアの面々が陣取る場所として建造されたものである。その脇から「アリンギエーラ」と呼ばれる棧敷がのびて政庁舎の周囲を塙のように取り巻いていた。ここもやはり儀式の際にシニョリーアの面々が座を占める場所であった⁹⁾。

1385年以降、大聖堂造営局（オペラ・ディ・サンタ・マリア・デル・フィオーレ）の監督下にレンガ舗装の作業が進捗し、この機会にヴァッケレッチャ通りの側にあったサンタ・チェチリア聖堂も取り壊された。広場の北東の角には、1359年から商事裁判所が建設され、現在もそのファサードに各アルテの紋章が残っている。また14世紀からは「アリンギエーラ」の角に都市の象徴である「マルゾッコ」という名の数頭のライオンが飼育された。ライオンの檻は1319年からサン・ピエロ・スケラッジョ聖堂前、のちには1550年まで政庁舎の裏側と場所を転々としたが、いまは政庁舎の裏側の道にレオーニ（ライオン）通りという名前をとどめているに過ぎない¹⁰⁾。

メディチ時代の増改築

メディチ銀行の創業者ジョヴァンニ・デ・メ

ディチ（1360-1429）の長男コジモ・イル・ヴェッキオ（1389-1464）が1434年に追放から帰還すると瞬く間に市政を掌握し、共和制の外観をまとった実質上のメディチ家統治時代（1434-94）が始まる¹¹⁾。そして1446年には政庁舎造営委員会（オペラーイ・ディ・パラッツォ）の発足が可決されて増改築が本格化する。

誰よりもコジモ自身が政庁舎を居心地よく快適にするための増改築を願った一人であった。まずコジモはラルガ（現、カヴール）通りのメディチ邸を設計した友人の建築家ミケロツォ（1396-1472）に依頼し、1454年、中庭の改築に取り組んだ。旧来の中庭はあわただしく無計画に雑然とせせこましく造られたものであった。そこでミケロツォは中庭を拡張し、窓を付けて通風をよくし、心地のよい回廊を造営した。中庭の漆喰の壁面には灰色の地肌に金色の百合が掻き絵であしらわれた。この装飾は16世紀に失われたが、近年の修復によりごく小部分が再発見されている。

ミケロツォは中庭のほかにも階段や内装にも手を付け、中二階の建設や塔の補強などもおこなった。また大聖堂のクーボラの建築家ブルネッレスキ（1377-1446）も、『ブルネッレスキ伝』の作者マネッティが断言するところによれば、青年時代に政庁舎の改築に重要な仕事を手掛けたいが、いまではその痕跡は残っていない¹²⁾。

コジモの孫ロレンツォ・イル・マニフィコの統治時代（治、1469-92）は最も華やかにルネサンスが咲き誇った時代である¹³⁾。1472年、建築家兼彫刻家のベネデット・ダ・マイアーノ（1442-97）が、三階の広間に仕切り壁を造る作業に着手し、広間を現在の「謁見の間」と「百合の間」に二分した。二つの部屋の天井とフリーズはベネデットの兄ジュリアーノ・ダ・マイアーノ（1432-92）やフランチェスコ・モンチャッティ、ジョバンニ・ダ・ガイオーレの手により豪華な浮き彫りと金箔がほどこされた。「謁見の間」の格天井にはフィレンツェ十字の紋章が縦横に並び、フリーズにはマルゾッコの

獅子頭と古代風の花綱装飾が交互に繰り返している。「百合の間」の壁と格天井には、部屋の名の由来となった青地に金百合がちりばめられ、フリーズにはコムーネ、ポーポロ、ゲルフィ党の紋章をそれぞれ二頭のマルゾッコが支える構図が繰り返される。広間の分割作業は、ダ・マイアーノ兄弟が二つの部屋のあいだの壁に「正義像」と「洗礼者聖ヨハネ像」のある「大理石風の門」を1476年頃に完成して終了した。その木製の扉は、ジュリアーノ・ダ・マイアーノとフランチェスコ・ディ・ジョヴァンニ通称フランチョーネ（1428-95）の作で、ダンテとペトラルカの肖像が彫り込まれている。

同じ1476年にはヴェロッキオ（1436-88）の傑作「ダヴィデ」（1470-75年頃制作、現、バルジェッロ国立美術館）が、ロレンツォから政庁舎に売却され「百合の間」に置かれた¹⁴⁾。そのヴ

エロッキオの弟子ポッティチェリ（1445-1510）は、「謁見の間」に円形画、おそらくは「柘榴の聖母」（1487年頃制作、現、ウフィツィ美術館）を描いたが、もう一人の弟子レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）は1478年に仕事を依頼されながら完成にはいたらなかった¹⁵⁾。その後、1482年から85年にかけて「百合の間」の壁には流行画家ドメニコ・ギルランダイオ（1449-94）とその協力者が「玉座の聖ザノビと聖ステファノと聖ロレンツォ」、そして左に「ブルータス」「ムツィオ・セヴォラ」「フリウス・カミルス」、右に「デチオ・ムーレ」「スキピオ・アフリカヌス」「キケロ」の古代ローマ人6名の肖像画を描き加えた。まさにフィレンツェ・ルネサンスの華やかなりし時代を彷彿とさせる作品群である（図3）。

図3 パラッツォ・ヴェッキオの「百合の間」



出典) *Ibid.*, p. 110.

共和制時代の増改築

ロレンツォが1492年に死去すると、そのわずか2年後の1494年には、フランス王シャルル8世のイタリア侵攻をきっかけにメディチ家は追放され、共和制が復活する。

1495年にはメディチ邸にあったドナテッロ(1386-1466)の傑作「ダヴィデ」(1435-42年頃制作。現、バルジェッロ国立美術館)とやはりドナテッロの傑作「ユディットとホロフェルネス」(1455-57年頃制作。現、パラッツォ・ヴェッキオ)が政庁舎に移され、前者は第一中庭¹⁶⁾に、後者は正門左側の「アリンギエーラ」に据え付けられた。ダヴィデとユディット、この二人の旧約時代の英雄がそれぞれゴリアテとホロフェルネスの首を打ち取る姿は、ちょうど共和政治がメディチ家を打倒する姿として政治的に再解釈されたのである。

共和政治の強力な推進者は、フランス王との交渉に成功したサン・マルコ修道院長ジロラモ・サヴォナローラであった。彼は1494年12月12日に次のような演説をしている。

「私の信ずるところでは、ヴェネツィア人の政府はじつにすばらしいものなので、他人から学ぶことはなんら恥ずべきことではない。なぜならその政府の形態は神から授かったものであり、市民のあいだでもなんらの異議もなく採用された形態だからである。」¹⁷⁾

このようにしてヴェネツィアを模範とする大評議会の創設が提案され、同年12月22-23日に可決された。新設の大評議会を開くには新しい議場が必要であった。新しい広い議場の必要性はすでに1452年以来ずっと痛感されていたが、深刻な財政難のために実現しなかったのだ。これを強引に実現に導いたのは、やはり「神権政治」をしくサヴォナローラであった。よって新しい議場もヴェネツィアの大評議会の議場をモデルとしていた。建設場所は政庁舎の裏側、つまりアテネ公時代の建造物などが雑然と建っていたところである。設計は、1495年7月15日の条令によりシモーネ・デル・ポライウオー口通

称クロナカ(1457-1508)に依頼された。これがのちに「五百人広間」と呼ばれることになる大広間である。

その建設作業は急ピッチで進められ、日記作者のルカ・ランドウッチは次のように記している。()内は松本の補足。

「1495年(現行暦の1496年)2月25日、政府が新しい広間に移った。広間は天井は張られたけれど、煉瓦も敷いていなかったし、ベンチも作られていなかった。パラージョ(政庁舎)には広間に通じる戸が作られていたが、下準備に穴を開けただけで、まだなにも付けられていなかった。」しかし建設途中の同1496年の「5月8日、日曜日、大評議会を招集するパラージョの大鐘になった。この大評議会を招集するために鳴ったのはこれが初めてだった。昼飯のあとのことだった。」そして「1496年5月11日、評議会の大広間に煉瓦を敷き終えた。」¹⁸⁾この記述から竣工前にすでに会議が開かれていることがわかる。

1498年5月には、大評議会と大広間の提唱者であったサヴォナローラ自身がシニョリーア広場で処刑されたが、大広間の内装の作業はその後も続いた。同年11月には、陰刻師クレメンテ・デル・タッソの手により天井中央の仕事が完了したが、それはフィレンツェ、コムーネ、ゲルフィ、守護聖人の8つの盾に囲まれたボーボロの盾がひととき目立つ意匠であった。しかし内装の最後の仕上げはゆっくりと進み、シニョリーアの特別席や説教壇が完成した1502年をもって完了した。

1505年には古い議場(二百人広間)と新しい議場(五百人広間)を結ぶ「リチェッタ(しのびの間)」と呼ばれる小部屋が完成した。大広間は従来の政庁舎の壁面から38ブラッチョ(22.19m)離れて建設されたため、両者をつなぐ通路が必要だったのだ。こうして政庁舎の敷地面積は約二倍に拡大した。

のちにヴァザーリは大広間の大きさを次のように計測している。幅は38ブラッチョ、西壁の長さは90ブラッチョ(52.56m)、東壁の長さは

106ブラッチョ (61.90m), そして高さは20ブラッチョ (11.68m)⁹⁾。つまり正確な長方形ではなく, そのために北のゴンディ通りと南のニンナ通りをいびつに変形させる結果になった。そしてさらに次のように述べる。「その並外れた大きさにもかかわらず大広間には光が不足し, かくも長大な図体に比べて寸詰まりの小人のように, 要するにまるでアンバランスなのだ。大広間の中程には, 東壁に二つの窓, 西壁に四つの窓が取り付けてはあるものの何の役にもたっていない。」²⁰⁾ だからヴァザーリはのちの1563年に天井を12ブラッチョ (約7m) 高くする大改築に取り組むことになるのだが, それまでの大広間は天井の低い採光の悪い部屋だったのである。

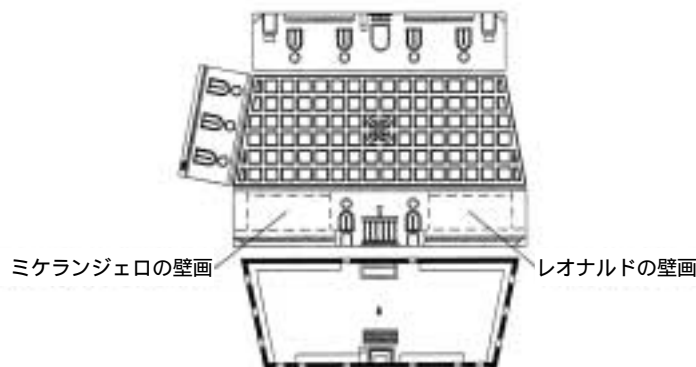
この薄暗い大広間が盛期ルネサンスの二大巨匠の競作の舞台となる。終身ゴンファロニエーレのピエロ・ソデリーニ (位, 1502-12) が, 1503年, レオナルドには対ミラノ戦 (1440年) の「アンギアーリの戦い」, 翌1504年, ミケランジェロには対ピサ戦 (1364年) の「カッシナの戦い」という二つの戦争画を委嘱したのである。これはフィレンツェ共和国の戦勝場面であるのみならず, 完成していればイタリア・ルネサンスの勝利の壁画となるはずであったが, 完

成にはいたらなかった (図4)。一部描かれていた壁画も1512年にメディチ家が復帰すると取り壊され, ただ下絵だけが長く保存されて若い芸術家にとっては「世界の学校」と呼ばれて模写・研究された末に散逸した。

ミケランジェロに「カッシナの戦い」が委嘱された1504年は, 彼の「ダヴィデ」が完成した年でもある。当初「ダヴィデ」は大聖堂に設置される予定で大聖堂造営局 (オペラ・デル・ドゥオーモ) の仕事場で制作されたが, 設置場所をめぐるポッティチェリやレオナルドを巻き込んだ論争の末に出た結論は, 政庁舎正門左手の「アリンギエーラ」の上であった。そこにはドナテッロの「ユディット」が置かれていたが, 「ユディット」を押しつけて4メートルをこす巨大大理石像が屹立することになった。宗教的意味合いは薄れ, 戦う共和主義者としての政治的意味合いが付与された設置場所の選定であった²¹⁾。

「ユディット」のほうは政庁舎内に2年間とどまったのちにロッジャ・デイ・ランツィの右側のアーチの下に移され, 1583年にジャンボローニャ作「サビーニ女の掠奪」に取って代わられるまで, その場所にあった²²⁾。

図4 1512年以前の五百人広間の再構成図



出典) アンソニー・ヒューズ, 森田義之訳『ミケランジェロ』岩波書店, 2001年, 84ページ。

おわりに～メディチ家の復帰

1512年、ロレンツォ・デ・メディチの次男ジョヴァンニ枢機卿（のちの教皇レオ10世）と教皇ユリウス2世の軍隊が、メディチ家の復帰をめざしてフィレンツェ近郊プラートを略奪すると、ピエロ・ソデリーニの共和国体制はあえなく倒壊した。ソデリーニは追放され、彼の右腕であった書記官長マキアヴェッリもこのときに職を失った²³⁾。メディチ家の復帰とともに政治の中心はメディチ邸に移り、政庁舎は重要性を失って五百人広間も兵舎と化すありさまであった。

1527年の「サッコ・ディ・ローマ」でメディチ教皇クレメンス7世がサンタンジェロ城に幽閉されたのをきっかけに、フィレンツェでは再度メディチ家が追放されて共和国が復活した。政庁舎はふたたび政治の中心となったが、しだいにサヴォナローラ主義の色彩が濃くなり、1528年にはイエス・キリストをフィレンツェ人民の王と宣言する銘文「Jesusu Chrisutus Rex Florentini Populi S. P. Decreto electus」が政庁舎正門のうえの二頭のライオンのあいだに刻まれた²⁴⁾。また1527年の擾乱で政庁舎のうえから投げ落とされた石が「ダヴィデ」の左手首を直撃する一幕もあった。この「最後のフィレンツェ共和国」は一時的かつ悲劇的なエピソードに過ぎなかった。というのも1530年に教皇クレメンス7世と皇帝カール5世の同盟軍がフィレンツェ包囲戦に勝利し、メディチ家が再度復帰したからである²⁵⁾。

復帰したメディチ家の当主は教皇クレメンス7世の庶子アレッサンドロ公爵（位、1532-37）であった。アレッサンドロ時代も政庁舎は荒廃したままであったが、彼が唯一手をつけたのは、1534年5月1日、ミケランジェロの傑作「ダヴィデ」と対をなすべく正門右手にバッチョ・バンディネリ作「ヘラクレスとカクス」を設置したことである。共和政治に打ち勝つメディチ家を表現したものであろうが、「ダヴィデ」とは比肩すべくもない駄作である。

アレッサンドロ公は1537年に暗殺され、コジモ1世が第二代フィレンツェ公（位、1537-74）になった。そのコジモ1世がナポリ副王の娘エレオノーラ・ディ・トレドと結婚した翌年の1540年5月15日、同時代の歴史家アドリアーニによれば、「絶対君主たることを示さんとして」メディチ邸から政庁舎に移り住んだ²⁶⁾。かつてシニョリーアの面々が住み込んできた城塞風の簡素な政庁舎は、このときから住み心地のよい豪華絢爛な「公爵宮殿（パラッツォ・ドゥカーレ）」へと変貌をとげることになる。それはパラッツォ史上最大規模の改築作業となるはずであるが、それについては稿を改めて考察したい。

注

- 1) ニッコロ・マキアヴェッリ、在里寛司・米山喜晟 共訳『マキアヴェッリ全集3 フィレンツェ史』筑摩書房、1999年。
- 2) 「市民的人文主義」については、Baron, H., *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton, 1966. および石坂尚武『ルネサンス・ヒューマニズムの研究』晃洋書房、1994年。
- 3) フィレンツェ史については多数の著作があるが、主に以下の著作を参照。ピエール・アントネッティ、中島昭和・渡辺容子共訳『フィレンツェ史』白水社、文庫クセジュ、1986年。佐々木英也監修、森田義之・日高健一郎編『フィレンツェ・ルネサンス』全6巻、1991年。斉藤寛海「イタリアの都市と国家」『岩波講座 世界歴史8 ヨーロッパの成長 11-15世紀』岩波書店、1998年。
- 4) ヴァザーリ、石鍋真澄訳「アルノルフォ・ディ・カンビオ」森田義之監訳『ルネサンス彫刻家建築家列伝』白水社、1990年、17-18ページ。
- 5) 以下、パラッツォ・ヴェッキオの歴史については、主に次の著作によった。Muccini, U., *Palazzo Vecchio*. Firenze, 1989; Orlandi, G. L., *Il Palazzo Vecchio di Firenze*, Firenze, 1977.
- 6) *Ibid.*, p. 52.
- 7) 統一以前のイタリアでは、元旦ひとつとっても、ミラノでは1797年まで12月25日、ヴェネツィアでは1797年まで3月1日、フィレンツェでは1749年

- まで3月25日とまちまちであった。
- 8) Muccini, *op. cit.*, p. 18.
- 9) この「アリンギエーラ」はフランス軍占領時の1812年に撤去された。
- 10) 15世紀には20-30頭にまで増えたという。森田義之「レオナルド・ダ・ヴィンチの《荒野の聖ヒエロニムス》とイタリア・ルネサンス期の動物表現」『ヴァチカン美術館所蔵品による 美術のなかの動物表現』豊田市美術館, 2001年, 16-33ページ。
- 11) メディチ家については多数の著作があるが、主に以下を参照。Hale, J. R., *Florence and the Medici*, London, 1977; Barugellini, P., *Storia di una grande Famiglia: I Medici*, Firenze, 1980. 森田義之『メディチ家』講談社現代新書, 1999年。
- 12) マネッティ, 浅井朋子訳『ブルネッレスキ伝』中央公論美術出版, 1989年, 70ページ, 145ページ。
- 13) ロレンツォについては, イヴァン・クルーラス, 大久保康明訳『ロレンツォ豪華王』河出書房新社, 1989年。根占献一『ロレンツォ・デ・メディチ』南窓社, 1997年。
- 14) Orlandi, *op. cit.*, p. 81.
- 15) *Ibid.*, p. 82.
- 16) ここにはコジモ1世時代の1557年にメディチ家所有のヴェロッキオ作「イルカを抱く童子」が置かれ, 現在にいたる。
- 17) Muccini, *op. cit.*, p. 20. サヴォナローラについては, サヴォナローラ, 須藤裕孝編訳・解説『ルネサンス・フィレンツェ統治論』無限社, 1998年がある。ヴェネツィアの政治体制については, 永井三明『ヴェネツィア貴族の世界』刀水書房, 1994年。
- 18) 『ランドウッチの日記』中森義宗・安保大有共訳, 近藤出版社, 1988年, 131-142ページ。
- 19) Muccini, *op. cit.*, p. 22.
- 20) *Ibid.*, p. 22.
- 21) 現在はこの場所に1873年に設置された模刻が立ち, オリジナルはアカデミア美術館にある。
- 22) 現在は「百合の間」にその製造過程の模型とともに展示されている。
- 23) マキアヴェッリとその時代については以下を参照。Villari, P., *Niccolò Machiavelli e i suoi tempi*, 3 vols., Milano, 1877-1882; Ridolfi, R., *Vita di Niccolò Machiavelli*, Roma, 1954; Gilbert, F., *Machiavelli and Guicciardini*, Princeton, 1965.
- 24) その後, 銘文は1851年に「Rex regum et Dominus dominantium (王の中の王, 主の中の主)」という現在のものに取り替えられた。
- 25) 「最後のフィレンツェ共和国」については以下を参照。Roth, C., *The Last Florentine Republic*, New York, 1925; Stephens, J. N., *The Fall of the Florentine Republic 1512-1530*, Oxford, 1983.
- 26) Orlandi, *op. cit.*, p. 127. また同時代の歴史家ベルナルド・セーニは1540年に大地震があったと述べた直後に転居の記述に移っている。しかし地震と転居の因果関係については触れていない。Cfr. Seni, B., *Istorie fiorentine*, Firenze, 1857, p. 374. また転居の理由のひとつには, メディチ邸が前公爵アレッシェンドロの暗殺現場となったことも考えられよう。上記のセーニによれば, アレッシェンドロの寡婦マルゲリータ・ダウストリア(皇帝カール5世の庶出の娘)をともなった転居だったからである。

(2001年12月12日受理)